宮崎医大整形外科

同門会誌

第　2　号

平成2年12月

宮崎医科大学整形外科学教室同門会

木村　千俣前教授近影

宮崎医科大学整形外科 田島直也教授御就任記念　平成２年５月26日　於 宮崎観光ホテル

第八十回西日本整形・災害外科学会にて
田島　直也会長の挨拶
（平成2年11月17日）

懇親会会場にて

あ　い　さ　つ

会長　河野雅行

時の流れは、速いものです。

木村前教授が宮崎医大に整形外科教室を開設されて、大過なく退官されました。

思い返しますれば木村先生以下伊勢、矢野両先生が県病院の裏の小さな部屋に間借をされており、岡田、武内両先生と私が県立延岡病院に里子に出された状態からスタートした訳ですが、その後大野、野津原、栄、川野先生・・等逐次賑やかになって参りました。それでもスタッフ不足の状態は慢性的にありまして、創設期のご苦労は察してあまりあるものがあります。誠にご苦労さまでございました。

あれから10数年が経ち今年、田島教授がご就任され教室も第二世代に入ったわけです。俗に創設よりも２代目で維持発展させる方がむずかしいとも申します。

ただ教授以下医局の先生方も、ファイトマンばかりですので、様々なテーマのもと今後活発な活動をされることでしょう。

東欧、中東情勢、国内情勢を問わず、激動と言う形容が相応しいほどに世の中は移り変わっています。医学界では、世の中の毀誉褒貶にとらわれることなく、究極の目的に向かって邁進すべきではありますが、身の処し方を考えておかないと、浦島太郎にも成りかねません。特に第一線で活躍中の先生方にはさぞかしご苦労のこととお察し致します。ますます日々の精進が要求されることとなりましょう。

しかしこのことは言い方を変えますれば、それだけ活躍の場が増えたとも言えます。

同様に、世紀末が近づいていますが、これは新世紀の始まりでもあります。

21世紀になって、国内はもとより国際的にも活躍出来るドクターでありたいものです。

幸い我が同門会は歴史が浅い分だけ、会員の平均年令が若いので、21世紀にもますますご活躍のことでしょう。そして、その頃には宮崎医大整形外科の赫赫たる名声が鳴り響いていることを期待します。

特別寄稿

整形外科学教室おめでとう—熊本の空の下から—

宮崎医科大学前学長　　玉　井　達　二

田島先生の教授、伊勢先生の助教授ご就任を、木村先生初め教室・同門の皆様、さぞご満足のことと存じます。私は今、皆様方のお喜びの顔を瞼に浮かべて、『本当によろしいでした。』と心からお祝い申し上げております。

皆様が田島教授を先頭にして、ご研鑽になり、貴教室・同門が益々健やかに、清々しく、又、限りなく大きく発展されますことを、心から期待し、確信しております。

そんな喜びの中で、私は医大創設準備の時、秋の風情を一杯に湛えた清武の、小高い山を借景とした静かな土地に立ち、これから繰り広がれるであろう大学創立の、色々なドラマに思いを馳せてたことを思い出しています。それはもう17年も前のことになりましたが、私にはつい昨日のように感じます。しかし、木村教授から田島教授へと松明が受け継がれた事を考えますと、改めて、月日の流れを強く感じます。

安井息軒先生によって、清武の地に植えられた学問の苗は、土に恵まれ、又、良い環境のなかで多くの人々の手で育てられて行きました。それと同じ様に、貴教室・同門の皆様のご努力によって築かれ、又、これから作られる良い土壌、良い環境中から、必ずや数多くの立派な人材が次々と育ち、真の人類の幸福に役立つ研究成果が、実って行く事と楽しみにしています。

私などは臨床の教室は、教育、研究、診療に力を注がねばなりませんし、更に地域社会への貢献も必要でありますのでこれは大変なことだと考えたものでした。そんな時、ナポレオンが「長靴の先までは栄養は回らない」と言ったということを知って、“なるほど”と一度は納得したものでした。しかし、ナポレオン一人では無理でも、多くの人々の協力があったならば、出来たのではないかと改めて思い、それを実現するためには、皆が他の人々の長所を見、常に奢ること無く謙虚であることが必要なのかも知れないと考えました。先日ある本の中で、北杜夫さんが『テナガザルは猿の中でも手も足も最も長く、樹から樹へ飛び移る術が、他の猿よりも数倍も上手である。しかし、余りにもやたら飛び移り、その上、樹の枝の中には枯れたり、細すぎたりするものが多いために、転落する回数も他の猿よりも圧倒的に多い。事実、学者が調べると、テナガザルの手や足には、骨折をしたり、瘤をつくっているものが、すこぶる多い由だ』と書いていました。それを読んで、どんなに秀でた能力を持ち、それを発揮しても、又、どんなに贅をつくした建物でも、自然の前に謙虚でないものは、どこか卑しいものが臭うと言い、又、いかなる物でも基礎になるのは『立派な心』なのだと言うことを思い出しました。そして『心がなければ、富士は描けない』という横山大観の言葉も、『躾と言う字は身偏ではなく、立心偏であるべきだ』と言った方の気持ちも判ったよう気がしました。

私はこの頃他の人々が皆素晴らしく見えて仕方がありません。の年になっても、学問は勿論、基本的な、人間として足りないことばかりだからでしょう。これを少しでも解消するために、『発展途上国のように、伸びる可能性を持ちつづけたい』などと言う不遜な事を考えていますが、全くお笑い種です。しかし、皆様は違います。今や心身ともに充実し、正に前途洋々、常に前進しておられます。誠に羨ましい限りです。しかし、人生航路は、平隠な旅ばかりではありません。時には海が荒れるときもありますが、そのときこそ海の男の腕の見せ所といいます。

私は難しいことにぶつかった時、とかく、あれこれと頭だけで考えてしまい、体が理解しようとしない悪い癖がありますが、よくいわれるように、どんなに苦労があると思われる時でも、体で受け止めて、理解することがあるかも知れません。よく老舗はそれなりの努力をしているといいます。老舗が名声を博し、価値ある存在であるには、数多くの苦難に、身をもって立ち向かう勇気と努力が必要であったと思います。英国人は苦境には微笑を含み、順境には勇気を振るうといいます。勇気とは静かなもの、優しいもの、正しい判断によってなされるものと私は思います。順境にある皆様が勇気を持って前進に前進を重ねておられることを拝見し、お聞きして、大変嬉しく思っております。

皆様は田島教授を中心に、がっちりとスクラムを組み、よい教室、良い同門を育てられることを熊本の空の下から、心をこめてお祈り致しております。

本当におめでとうございました。重ねてお喜び申し上げます。

「ゆ　と　り」

木　村　千　仞

昭和ひとけた生れの戦中・戦後体験者からみると、あの無惨な姿の日本が現在のような繁栄をきたすと予測をした者は誰もいなかったであろうと考えるが、これも「大正、昭和初期生れの明治男」たちの血の滲む努力の結果であることは、厳然たる事実である。そろそろ老境にいたるこれらの人々に「ゆとり」ある人生を送って貰いたいものだが、いつも後手に回る老人問題が解決されない日本の現状では、如何なものであろうか。

戦後の驚異的な産業経済の発達によりＧＮＰは上り、経済大国といわれるようになって20年以上経過した。

日本の首相たちは、海外のあちこちを巡って気前よくお金をばらまいてくるが、吾々が払った税金の行方も判らず、庶民の生活はそれ程楽になった感じもなく、酷税と物価高、土地・家の高騰にあえいでいるのが大多数であり、一般生活の「ゆとり」も、精神生活の「ゆとり」も未だしの感がある。18年前、外遊したとき欧州の Dr. から日本医師の月給はいくらか、と聞かれ、35才前後の大学助手で15～16万だと答えたら「ＧＮＰ世界２位の国でそんなことは考えられない。欧州の若いナースと同額だ」と驚いていた。

物が豊かになり、吾々庶民が中流意識をもてるようになったことは喜ばしい限りであり、こうした平和な社会が永続的かつ普遍的であって欲しい。ただ一部に「カネ余り」をいいことに株だの土地だのと狂奔し、リクルート事件まで引き起こすに至っては心の貧しさもここに極まったとしかいえない。徒然草にいう「むかしより、かしこき人の富めるはまれなり」ということか。物の豊かさと心の貧しさ（ゆとりなさ）をどう均衡させるかが問題である。

私が初めて日整会誌に mit で発表させて貰ったのは第29回（昭和31年）横浜市で開催されたものであるが、当時、総演題数171題を３日間１会場でほとんどチーテルアルバイトの発表であった。基礎３、臨床１の割合で討論もかなり活発で興味を湧かせた印象が深い。因みに今年の春・秋、日整会発表は合わせて1400題近くあり、数も30年で8.2倍に膨れ上り、会場も十数ヶ所と多く、当時と雲泥の差である。まことに慶祝にたえないが、中には研究会・地方会発表済みの焼き直しや、こんなものをと頭をかしげたくなる内容の駆け込み発表も少なくないし、これを単に時代の相違とだけで片付けられるものか疑問に思われる。「ゆとり」を感じさせる重厚な研究発表をよく噛みしめたいものである。

かつて熊大から名大へ移られた今永教授の話で、留学先のハイデルベルグの教授は論文を書いてから１年位は机の引出しに入れて、毎日繰り返えし読んでこれなら大丈夫と思ったときにはじめて雑誌に載せるが、それでも時々誤りを来たすので申しわけないと語られた由であった。そういえば最近の発表には、その場限りのＰＲを目的としたものや、口演原稿のような論文をみるにつけ、一抹の懸念を覚えるものである。時代に合わないかも知れないが、人間のイマジネーションは「孤独と充分な時間的余裕」を与えられてこそ効率よく働くのではないか。世界の論文別刷を並べると、２年間で１里に達する膨大なものらしいが、ノイエスといえるものはほんの数える程しかないであろうが、それに挑戦する若い研究者達に与えられて欲しい「ゆとり」は、現代では夢であろう。

旧制五高時代、Ａ教授のドイツ語講義の前にある生徒が黒板に「ドイツ語は夫婦喧嘩にさも似たり、デルのデンと大騒ぎかな」と落書きした。教授は教壇に上るとこれを一瞥されたままで講義に入り、落書の上に説明語句を書かれて生徒は大いに困ったという話。自ら播いた種子の結末を生徒に教えた多年の知恵であったのだろう。こんな「ゆとり」教授も近年いなくなったのではなかろうか。

新しく変りゆく時代の中で、人間として何か大事なものが失われてゆく淋しさを感ずるものも多いであろう。

あ　い　さ　つ

教授　田島直也

今回、昭和63年１月の創刊に続いて、宮崎医科大学整形外科学教室の同門会誌２号の発行のはこびとなりました。しかし、この創刊から２号までの間に教室・同門には大きな変化がありました。

まず、昭和49年整形外科学講座を開講され、16年間教室の主任を務められた木村千仞教授がこの３月御退官されました。

先生は開学と同時に主任助教授として赴任されましたが、昭和52年附属病院開院までは病院もなく、当然の事ながら教室員も少なく特に初期には御苦労が多かったと思います。その後教室員も増え、昭和62年には日本リウマチ・関節外科学会を主催され、本年の日整会では名誉会員になられました。今後は市民の森病院リウマチセンター所長として、学外から御指導頂けるものと思います。ここに、あらためて教室・同門を代表して謝意を申し上げます。今後、先生が健康でますます御活躍されることを祈念いたします。

同門会の方も組織がかわり、従来教授が会長を兼務していたものを学外からも可能とし、二代目同門会長には河野雅行先生が就任されました。組織も段々大きくなりますし、今迄とはまた違った同門会活動がなされるものと期待されています。

一方、教室の方は不肖私が４月１日付で宮崎医科大学教授を拝命し、整形外科学教室を引き継ぐことになりました。私は昭和54年11月に宮崎に赴任し、助教授からの昇格で今迄の教室の流れもみてまいりました。この約15年の創設期の基礎の土台の上にさらに発展させていきたいと念願しております。

宮崎医大整形外科の特徴として、既設の大学のカラーにとらわれる事なく、新しい宮崎医大を作っていくために、人材も広く全国に求めています。宮崎県出身の Dr. も次々と集まり、医局員46名、同門61名（他賛助会員12名）中出身大学は17大学に及んでいますが、これは全国でも珍らしい事と思われます。

一方、宮崎医大設立時の目標として、「辺地医療の礎」があります。これは、特に九州山地沿いの東側地方の医師不足、辺地医療と大学、関連病院との関係など、今後宮崎医大にとって大きな課題であります。

私の仕事としては整形外科の中でも主に脊椎外科関係を行ってきて、研究面では、脊椎固定術、Spinal Instrumentation の開発、脊柱管狭窄症の病態の解明、生体運動の高次活動の解析の他、スポーツ医学の運動生理的研究を行ってきました。

今後の教室の研究面は① Biomechanics 、生体工学、生体力学的研究と②骨・関節の病態生理、生化学的研究を柱にやっていこうと思っています。臨床面では、今まで４つのグループ（リウマチ・下肢、脊椎、股関節、手の外科）で診療を行ってきましたが、関連病院を含めて見直しを行い、疾患によってはセンターを地域全体の視野の下に作っていきたいと考えています。又、日医の生涯教育にもなっている“健康とスポーツ医学”のスポーツ医・科学的研究も続けていくつもりです。

又、あと１ヵ月の11月17、18日は宮崎で第80回西日本整形・災害外科学会を開催することになりました。

宮崎で開催されることはすでに２年前に決まっていて、昨年から会場等の予約は行っていました。しかし新体制での初仕事であり、伊勢助教授、桑原医局長を中心に準備中です。一次〆切には350題以上の申し込みがありましたが、最終的には一般演題約250題になりました。外人講演はスイスの Prof. N. Gschwend 、又第80回本学会記念講演として整形外科医には専門外ですが、最近話題の肝移植の問題について京大小澤教授にお願いし、この他教育研修講演２題を計画しています。

学会が無事終了することを願っております。同門・教室の先生方には大変お世話になり、この場をかりて御礼申し上げます。

大学の使命として、教育・研究・診療があげられますが、医学部の教育に関してオスラーはすでに19世紀にマシュ・マーノルドの言葉として、教師（教官）の機能とはこの世に存在し教えうる最高のものを教え、かつ伝え広めることであると述べ、医学部の教師（教官）には重い責任があり、医術は人間の苦しみを救うため、全世界に共通する普遍的なものであるといっています。

私も卒前・卒後の教育・研究・診療面に全力投球し、新しい世界に誇れる教室作りを目ざしていこうと思っています。どうか同門の先生方には今後とも暖かい御支援を心からお願いいたします。

◀第80回西日本整形・災害外科学会懇親会で挨拶をされる
玉井　達二前学長
（平成２年11月17日）

▼第80回西日本整形・災害外科学会で座長をされている
木村　千仭前教授
（平成２年11月17日）

第80回西日本整形・災害
外科学会懇親会にて
木村　千俣前教授(左)と
Norbert Gschwend 教授(右)

第80回西日本整形・災害
外科学会
～ 会場受付風景 ～

～ スライド、進行係 ～

～ 学会本部風景 ～

おつかれ様でした。

整形外科医局
野球チーム

第33回西日本整形外科
親善野球大会―長崎―
にて。
（平成２年８月19日）
～ 勇士たちの面々 ～

～ 第33回西日本整形外科
親善野球大会前夜祭風景 ～

しっかり食べて、がんばって！

ビールを片手に明日の
試合に気合いを入れる、
ピッチャー松元。

さあ、試合開始！

背番号30（田島教授）
を囲んで。
オイッ、元気がないぞっ。

試合終了間近。
ボー然と立ちつくす選手たち。
— 来年こそは、がんばって下さいネ。—

目　　次

あいさつ……会長　河野　雅行

特別寄稿

整形外科学教室おめでとう―熊本の空の下から―……宮崎医科大学前学長　玉井　達二

「ゆとり」……前教授　木村　千佞

あいさつ……教　授　田島　直也

随　　想

“せいゆうかい”だより……岡田　光司…1

10年間のブランク……伊勢　紘平…2

医局長のひとこと……桑原　　茂…2

医局長時代の御礼と御詫び……平川　俊一…3

教室の夜明け……長鶴　義隆…3

脊椎グループのリーダーとしての抱負……松本　宏一…4

下肢グループの一員として……三股　恒夫…4

今後の宮崎医大整形外科発展のためのアドバイス……武内　晴明…5

上肢班を振り返って……山口　一郎…7

医員・研修医自己紹介……8

教室同門の研究業績……17

同門会員名簿……30

賛助会員名簿……46

編集後記……50

随　想

“せいゆうかい”だより

岡　田　光　司

昭和63年11月某日、宮崎市内の某所にて20数名の男女の集りが行われ、“せいゆうかい”なる会が発足しましたことを、この紙面にて同門の諸先生方にお知らせいたします。初耳の先生方もおられるかと思いますが、この会は知る人ぞ知る、宮崎医大付属病院２階東病棟で勤務した整形外科医と看護婦の各々のＯＢと現役との集う親睦会のことです。15年前の一昔半の話ですが、昭和52年11月１日の付属病院開院時の２階東の職員構成は整形外科医は木村助教授（当時）をはじめとして、伊勢、矢野、河野、大野の先生方と小生の計６名、看護婦は奥婦長をはじめ上沖、富永、川越、林、木下、野中、川並、田宮、山内、中村、竹下（順不同、旧姓表示）の計13名の総勢19名でした。以上の新進気鋭の初々しい？スタッフが集り、現在の病棟を半分に区切って20ベッドとし、整形外科診療が始まりました。

０からの出発ということで、現在では考えられないほどの初歩的な問題の解決などでもああでもないこうでもないと四苦八苦しながら医師、看護婦の全員が一丸となって当たり、それなりの苦労をしてきたものでしたが、一方ではレクレーションその他でも全員一致で頑張っていたようでした。その後徐々に人員が増えてきて、そして各自がそれぞれの進べき道へ散っていったわけです。そのうち何時の間にか病院開院時の懐かしい仲間ということで、お互いに声をかけあい、なにかにつけ集まり合う機会が設けられるようになりました。ＯＢのみに限らず病棟勤務の長い現役の方も参集されるようになり、昔話のあれこれや近況のおしらせなど肩の凝らない親睦会として、きままに開催されてきました。

昭和63年11月の会で、田島助教授（当時）の提案もあり、定例会の発足を参加者全員で決めた次第です。だからといって特に会長・会則などを設けることもなく、このままでいこうということでしたが、会の名称ぐらいは決めようといろいろと案が出されました。清武で遊んだ仲間ということで“清友会”“清遊会”、整形外科の仲間ということで“整友会”などが上げられましたが、結局これ等の意味を込めて“せいゆうかい”なるネーミングに落着きました。

開催時期は“秋の仲秋の名月の頃が良い”ということで決り、次回の幹事（連絡係り）ということでたまたま小生がお引受けすることになりました。以来、会の趣旨に沿うべく、会の開催の機会をうかがっていましたが、諸般の都合で今回もできませんでした。女性軍からの要望も強いようですので、是非来年こそはと考えておりますので、この会をご存じの先生方はなにとぞご了承ください。またご存じのない先生方におかれましても、以上の経緯をご理解の上、よろしければ“せいゆうかい”へのご参加をお願いいたします。

“10年間のブランク”

伊　勢　紘　平

平成２年７月16日付をもって大学へ帰って来ました。思い出してみますと昭和54年９月30日をもって、宮医大を退職しました私が、10年後にまた、宮医大に現れるという事は、医局のある先生が言われたように亡霊の出現ととられる方もあるかと思います。現在４ヶ月を過ぎましたが、テンポの速さに少なからずとまどっているというのが正直なところです。私のこの10年間というのは、一般病院での生活でありましたが、毎日毎日患者の診療のみであり、たまに、興味のある症例があれば、これをまとめ、また先輩から引き継いだ治療成績をまとめるという事が仕事でした。そして今大学へ帰って来て、学会、研究会、委員会、etc の仕事をしていますと、何か別世界に足を踏み入れた感じがしないでもありません。しかし乍ら、この若い医局に籍を置きますと、新鮮な息吹きを感じます。勉強をするにも、スポーツをするにも、あるいは酒を飲むにしろ若々しさ、荒々しさがあって、頼もしい限りです。私自身は10年間のブランクがあった訳ですが、この教室にはそんなブランクはありません。木村前教授の流れから田島教授への流れとして続いているのですから、その流れをより大きくする事が私達医局員の使命と考えています。次第に大きくなってゆく同門会ですが、三角形を上から作るのではなく、下の底辺としての役割を皆で、作ってゆこうではありませんか。

医局長のひとこと

桑　原　　茂

世の中一般に若返りの風潮がある中、年寄りの冷や水といわれながら医局長に就任して数ヵ月が経ち、そろそろボロの出始めた今日この頃ですが、生来の楽観的性格と最近流行のファジー感覚で医局の運営に携わっております。まあ、私が考えますに医局長の仕事は教室主任である教授を始め上層部の指示や考えを医局員に伝えるのが主な役目で、頭を使う必要がなく体力勝負の職務でありますので、遊びごとで鍛えた根性にものを言わせて勤めを全うしようと思っています。

前置きはこれくらいにして私の在任中もっとうとしていることを述べさせて頂きますと、信賞必罰に尽きるのでありまして、楽をして良い思いはさせないぞということです。そのかわり頑張ってくれた人には損をさせないように配慮し、皆が納得して医局の仕事をしてくれるようにしていきたいと思っています。短期間で見ればアンバランスなこともでてくるかと思いますが、医局の運営には以上の考えを忘れずにやっていく所存ですので、宜しくご協力をお願い致します。

1990年は教室にとって大きな変化のあった年でしたが、なんとか良いスタートが切れたかなと思われます。今後はより素晴らしい医局を作れるようみんなで頑張っていきましょう。最後に駄川柳を一つ。

『田島丸、御伊勢参りで、鶴とまり。』

医局長時代の御礼と御詫び

平　川　俊　一

昭和62年７月から平成２年６月までの２年間、医局長をさせていただいた。なにかの機会にその総括をしたいと考えていたが、同門会誌の原稿依頼があり良い機会と思いましたので一言。

医局長の話があった時には他にも適任者は居られたが、その頃は色々の事情があり引き受ける羽目になってしまった。勿論まだその重責を果たせるような器でなかったことは皆様ご存知であり、本人が一番解っているつもりであった。しかし私が引き受けるしか無かったこともまた本当であって、この事が少しは私の色々な不始末の言い訳として響いてくれればいいなと思っている。

この期間の一番の出来事は木村前教授の退官と田島先生の教授就任であろう。この時期には同門の先生方を始めとし、皆様に筆では書き表わせない程の御援助を頂いた。御礼を申し上げます。長と名のついた立場で御会いする方は皆、私よりも年令、経歴等上の方ばかりで、場慣れもしておらず、また人付き合いがどちらかというと苦手な私にとりましては、大いなるストレスでありました。しかし今考えますと、色々やきもきさせたり、失礼をカバーして頂いたりして、廻りで視られておられた皆様の方がハラハラされていた事と思います。私のストレスの周りを更に大きなストレスの輪が囲んでいた事実は、これはちょっと滑稽な気もし今となっては笑える感じです。私は元来、物事をちゃかして考えるほうでお許しし下さい。

私達は新しい出発をしたばかりでありますが、今後、私が皆様にお掛けするであろうと予測（確信かも）される新たなる御迷惑の御詫びを先取りさせて言わせて頂き、御礼と御詫びの駄目押しとさせて頂きます。

教　室　の　夜　明　け

長　鶴　義　隆

田島先生の教授就任後、新たな教室への大きな期待と不安感をいだきながら、大学本来の使命とも言うべき教育、診療、研究面における教授の所信表明を拝聴して以来、最早半年が過ぎ、各自がその責務を目覚し、新たな協調体制のもとに平穏な心境で業務を果せるようになった田島教室時代の到来で以前に比べ教室は大きく様変りしてきた事実は、誠に喜しく、医局員各自が長年待ち望んでいたまさに“教室の夜明け”に違いない。これからが仕事に真剣に打込める風潮が確立され、その成果は近い将来に明白になることだろう。

さて、昭和59年以来、取り扱ってきた成人、小児の脱関節疾患に限ってもその数は膨大な数にのぼり、それまで当地で施行されてきた医療の歴史の一端を目の当りにみせつけられたような悲哀感さえ覚え、人ごととは思えず一人落胆することさえある。このような状況は、いずれ解消され東京、大阪などの都心で行われているような高度医療が、当地でも一刻も早く実現可能となる日がくることを期待してやまない。

脊椎グループのリーダーとしての抱負

松　本　宏　一

平成２年４月１日より当教室の教授に田島先生が御就任になり私達医局員は新たな道を歩みだしたわけです。周知の通り田島教授は脊椎外科が御専門であり、新入医局員にはまたとない修養の場を、脊椎専門医を志すものには恵まれた研究の場を与えていただいています。私が入局した頃には田島助教授（当時）は外遊中であり、脊椎外科は若頭の川野桂一郎先生が中心になって診療をおこなっていました。その後田島先生も帰朝され、続いて股関節には特に造詣の深い長鶴先生が来宮されまして教室の診療体制も次第に充実していったように思います。脊椎関係の研究では山口先生が姿勢の調節について、川野先生がキモパパインについての論文を著しています。川野先生には研究の傍ら私共脊椎グループの長としてよく御指導頂きまして、これから脊椎外科を習ってゆく人達も含め感謝しております。田島教授は就任後に伊勢先生を助教授として、桑原先生を医局長として教室に迎えられ診療及び研究に万全の体制を敷かれました。脊椎グループに属する者としまして医局員がそれぞれ楽しく働き、協同して思索し、その中から優秀な人が現れることを願っています。

『下肢グループの一員として』

三　股　恒　夫

私は宮崎医科大学整形外科に入局して８年目になります。今年７月より大学へもどり、整肢学園、麻酔科研修、高千穂町立病院そして公立多良木病院と最短６か月から最長２年の修行の旅もようやく一区切りかなと思っているきょうこのごろです。この数年を振り返ってみますと、いろんな想い出が思いおこされます。３年目で初めて一人部長として勤務した高千穂町立病院では、外来看護婦さんに整形外科診療の「いろは」を教えていただき、患者さんの目の前で教科書を開き一緒に勉強することも多々ありました。また、手術についてもその適応が正しいのか、術後の経過はこれでいいのかと不安な日々を過ごすことも度々でした。少し外来診療にも慣れ、手術の楽しさ、怖さ、そしてその難しさが、ようやく分かり始めたころに赴任した公立多良木病院では労災、交通事故患者の書類上の問題等で悩まされながらも忙しい仕事の合間をぬっては釣り（山女魚）にゴルフにと楽しい思いもさせていただきました。

さて、このような地域の中核病院では腰痛と膝疾患が最も多く特にＯＡには治療の面で悩まされました。今回、大学への配属がきまったことは膝を勉強したいと思っていた私にとって大変な幸運でした。

私達下肢グループ、今年７月より新たに伊勢助教授をチーフに迎えスタートしました。膝、足関節の先天性疾患、そして外傷等が下肢グループの研究、臨床の中心となっております。

私自身、経験も浅くグループのスタッフに迷惑をかけてばかりいますが、これを期に伊勢助教授の指導の下、研究に臨床に研鑽したいと思っております。

今後の宮崎医大整形外科発展のためのアドバイス

熊本市民病院リウマチ科
武　内　晴　明

今年の４月、田島先生が教授に就任され、田島新体制が発足しました。我々同門の期待は大なるものです。如何にしてより良い教室を創るかは、如何にして良い人材を育てるかによります。そのための条件は、１つは各人が良き医師となるための自覚を有することですが、もう１つは教室としての整形外科医教育システム作りであろうと考えます。勿論、私が在局していた約13年間の期間においても田島先生の提案により部位別のグループ制が発足し、それなりの成果は得られたと考えます。

そのグループ制とは上肢が山口一郎先生、脊椎が田島先生と川野桂一郎先生（最近は松本先生）、股関節が長鶴先生、下肢・ＲＡは木村前教授と私が指導的役割を果し、研修医はこの４つのグループを６ヶ月単位でローテーションし、その他整肢学園（今の子供療育センター）及び私が現在勤務している熊本市民病院の麻酔科（尾方信也先生の御指導）をローテーションしておりました。さらにこの研修期間が終了した後（実際は２年半から３年）は関連病院を６ヶ月～１年のローテートするか、又は大学に残って各グループの縦割りの体制が発足しましたが、前述のグループ制への反省からこの新体制が発案されたものと推察します。

しかしここで自分なりに以前のグループ制の評価を行っておきたいと考えます。以前のグループ制は当医局のその時期においてはそれなりにある程度の成果が得られたのではないかと考えます。利点としては研修医が整形外科の各部位の各疾患を能率的に研修することが出来たことです。

しかし問題点としては研修を終了したスタッフに関して、大学の使命である研究、教育、診療の３本柱のうちの研究活動がおろそかになっていた面は否定できません。あるいはおろそかになったという表現が不適切であれば、臨床面が多忙すぎて研究に当てる時間が不足したのではないかと考えます。このグループ制の研究面での評価をどのような尺度をもって行って良いかは良く分りませんが、この制度下で学位を取得した者は大学院（甲）３名、その他（乙）２名のわずか５名です。しかし大学院の場合は他の教室（基礎）で研究したのですからこのグループ制で学位を取得したことにはなりません。この例のみで判断するわけにはいけないと思いますが、今までのグループ制ではやはり研究という観点かる見ると成果は上りにくいようです。

研究の成果を上げるためには研究意欲がないとだめです。又研究遂行能力がないと成果は上りません。ここで研究成果を上げるための一つの案を考てみました。

まず、最初の２年間は臨床のみに従事させるそして２年後に本人の希望をきく、つまり、研究をしたいか、したくないかである。したくない人には臨床に専念してもらう。しかし臨床研鑽過程で研究に興味が出てきたら教授の判断の基に許可するかどうか決定する。一方最初の２年間（研修医の期間）が終了した時点で研究を希望する者に対しては、教授が研修期間の２年間の研修態度等を参考にした上で研究適格者か不適格者を判別し適格者のみに研究活動を許可する。研究意欲、又は希望はあっても研究遂行能力の欠如する者はあり得る、例えばデーターの簡単な統計処理（ｔ－検定や相関関数の算出 $\gamma = \frac{\Sigma(xi-\bar{x})(yi-\bar{y})}{\sqrt{\Sigma(xi-\bar{x})^2 \cdot \Sigma(yi-\bar{y})^2}}$）

する理解できない者も実際にはいるのである。研究適格者の必要条件とは下記の如きものではないかと考えます。

(1) 研究に対する意欲がある。

(2) 自分で研究課題を発掘する能力がある。

(3) (2)がなくても与えられた課題の問題点を把握できる。

(4) 研究遂行能力があり、研究目的に対してシステマテイックに手順を組み立てる能力がある。

(5) ２年間の研修期間を再評価し、自分に与えられた仕事を確実に行っている（カルテ整理や手術、所見記載をきちんと行っている）者

(6) 人との共調性がある（特に田島教授と仲が良いことが大切）

(7) 研究を遂行していくのに必要な気力と体力を有する事（シーズン中の野球のみでは体力の増強は望めない、体力増強のためには毎日３～５㎞の jogging と出来れば水泳又は自転車がよいと考える）。

上記の条件を満した者に教授が研究の許可を与えられたら良いのではないかと考えます。

研究の場として大学院を選ぶかその他を選ぶかは問題のある所でありこの判断については私の能力外ですので言及したくはありませんが一言いえば大学院の場合は医局のコンセンサスが必要ではないかと考えます。

以上研究面について述べてきましたが、一般臨床面でやって欲しいこととしては、全日本レベルで「さすが」と言われるような仕事、業績を行ってもらいたいと考えます。脊椎関係では新しいタイプの instrument の開発（形状記憶合金の応用）や簡単な手技による椎間板ヘルニアの治療（キモパパイン注入法や経皮的髄核摘出術）など、又長鶴先生には素晴らしいＳＡＯ手術の普及をお願いしたい。

一般臨床面でのもう一つの希望は、宮崎医大で不得意とする分野を充実させることです。

私が感じたところでは、当医局で弱い分野は、肩関節の外科、末梢神経疾患の検査と治療、骨軟部悪性腫瘍、リハビリテーション、及び外傷（救急医療）であったと思います。

その解決策は、やはりその分野で日本のトップレベルの施設へ６ヶ月か１年間意欲のある人を研修に出す（国内留学させる）ことではないかと考えます。

宮崎医大には今後発展して行くのに十分な優秀なスタッフが多数います。私が感じる所では自分より頭がよい者は全医局員の⅔はいると思います。例えば高鍋の秀才である中村誠司先生、口から生れた帖佐先生、高千穂に生れなかったら東大にでも合格したかもしれない黒田宏先生、理屈では絶対かなわない戸田、平川先生などです。これらの逸材を田島教授及び伊勢、長鶴、桑原先生などの経験豊かな先生方が育て、よりレベルの高い整形外科教室へと発展させて下さることを期待しております。

上肢班を振り返って

山　口　一　郎

昭和55年より上肢班に入り、その中でとびとびではありますが現在までにいたっております。この間の上肢、末梢神経関係の疾患は非常に variety に富んでおりました。印象に残っているだけでも左肩の軟部悪性腫瘍、養鰻の機械にはさみこまれた右上肢の挫滅創、右手の血管腫で部分切断した後 care に難渋した patient 、切断指（趾）、 etc 。初期は比較的 anomaly hand が多く毎月その ope が入っていたように気憶しております。最近は anomaly が少なくなり non union 、 shoulder joint trouble 、等が比較的目立つようになりました。

この間、次世代を輩負って立つ人材も着々と育ってきつつあります。このことは上肢班に限った事ではないのですが、実に頼もしい限りです。私は遠距離通勤のせいもあり飲み会の出席は少いのですが、それでもたまに出席させていただきます。数年前とは比較にならぬ程の盛り上り、多芸、 energy ……。圧到されます。しかし、これこそ整形外科医局のあるべき姿と意を強くしております。

願わくば、勉学に診療にスポーツにまた、 after five にも、各々がその能力に応じて持ち前を発揮され医局が益々発展するようにと期待し、かつ自分自身も頑張っていきたいと思います。

医員・研修医自己紹介

氏　　名　黒　木　隆　男
生年月日　昭和36年６月２日生
出身高校　宮崎南高校
出身大学　宮崎医科大学　昭和63年入局
血 液 型　Ａ　型

昭和36年６月２日生まれ。椎葉村の田舎に生まれ、中学校まで過ごしました。その間小学校３年から中学校まで剣道をしていましたが、小学６年の時に同じ医局の黒田先生率いる高千穂のチームと対戦したことがありました。宮崎南高校へ進学してからは、下宿生活を送りクラブ活動はしていません。

宮崎医科大学に進学後野球に明け暮れる日々が続き、有意義な学生生活を送ったかどうか疑問ですが、良き先輩や友人に巡り会えたことは大きな宝になっています。私は８期生ですが、野球部の先輩の整形外科入局者はいません。野球部出身の入局は私が１期生となり、当時助教授の田島先生の大きな期待と希望を感じずにはいられませんでしたが、ここ３年はその期待を裏切っているようです。

入局後殆ど大学に置かせてもらっていますが、医局長の桑原先生の弁によれば、「外に出すには心配」なのでしょうか？　半年間「こども療育センター」に勤務しました。

平成３年度からは大学院に行かせていただいて、顕微鏡の勉強をしてきたいと思います。

氏　　名　柏　木　輝　行
生年月日　昭和36年10月15日生
出身高校　高鍋高校
出身大学　宮崎医科大学　昭和63年入局
血 液 型　Ａ　型

高鍋高等学校卒業し大宮高等学校補習科を経て宮崎医大に入学しました。小、中、高の12年間は、無欠席、大学では、ラグビーと肉体労働ばかりの生活でした。クラブの先輩に「力と体力でのりきれる科はありますか」という問いに対し、「整形」と答えて下さいました。しかし入局してみると力と体力のみで突走るのは立山先輩とぼくぐらいなもので、優秀な先輩方に圧倒される毎日です。クラブをやめ年々増加する体重と減りつづける筋肉、最近筋鉤をもつ腕もゆるみがちです。

整形外科の病棟の雰囲気はぼくには非常によく合っているようで、患者さんとの触れ合いも好きです。

今後は、唯一の特性である力と体力を維持し、先輩方に少しでも追いつけるよう日々精進したいと思っています。

氏　　名　園　田　典　生
生年月日　昭和39年11月27日生
出身高校　小林高校
出身大学　宮崎医科大学　平成元年入局
血 液 型　A　型

整形外科に入局し１年半が過ぎた。学生時代のクラブの部長の某教授に先日会い、「少しは、お医者さんごっこができるようになったか？」とひやかされ、照れ笑いしたばかりである。この１年半はあっという間に過ぎ、今振り返るとはたして、自分がどれだけ医者として成長したか疑問になると同時に自分の無知さを改めて認識させられる。何事も経験というがその経験がない自分にとり今、何をすべきかを考えたら今までどうりに与えられた症例１つ１つをしっかり学んでいくという結論に達する。今年の12月から日向に赴任するが、大学とは違う外傷などの症例が多くなるだろう。期待もあるがそれだけ責任も大きくなる。やはり、整形外科を選んで正解だったと思う。先生方、今後ともよろしくご指導お願いします。

氏　　名　田　中　史　郎
生年月日　昭和38年９月５日生
出身高校　宮崎西高校
出身大学　宮崎医科大学　平成元年入局
血 液 型　B　型

私が宮崎医大整形外科に入局しまして、早くも１年と４ヵ月が過ぎようとしています。整形外科医としてのスタートを切ってまだわずかですが、多少は整形外科学の輪郭が見え始めてきたような気がします。入局した当時は右も左も分からず、戸惑うことばかりでした。実際の医療の現場というものが学生の頃に想像していたものとかなり違うことに気づき、悩んだこともありましたが、諸先輩方のあたたかいご指導により無事に１年を過ごすことができて、非常に感謝しています。

さて、自己紹介と今後の抱負ということですが、昭和38年に鹿児島市で生まれました。その後各地を転々とし、宮崎に住むことになり県立宮崎西高校に入学、卒業後、昭和57年に宮崎医大に入学しました。学生時代にはバドミントンやゴルフ等のクラブ活動を行いました。目立った成績は残せませんでしたが、よい思い出になっています。そして、平成元年に大学を卒業し、この整形外科医局に入局しました。整形外

科を選んだ理由は、外科系の科に進みたいという希望があったということや、これから高齢化社会を迎えるにあたり、整形外科的疾患も増え整形外科医の需要も増えるであろうといったようなこともありますが、医局の雰囲気がよく、自由な雰囲気の中で仕事をさせてもらえるのではないかということが一番の理由ではないかと思います。入局後の１年を振り返ってみて、ただ、わけも分からずに突っ走ってきただけのような印象がありますが、これから勉強しなければならないことの多さに、気の遠くなる思いがします。これからも医学は進歩し、それに連れて医師に要求される事も多くなっていくでしょうが、初心を忘れずに努力していきたいと考えています。

氏　　名　尾　田　朋　樹
生年月日　昭和36年７月３日生
出身高校　日向学院高校
出身大学　東海大学　　平成２年入局
血 液 型　Ａ　型

まず自己紹介をさせて頂きます。

出生地は大分県別府市です。幼少時一時期熊本県植木町に在住し以後宮崎に移ってきました。宮崎市立大宮小学校を３年生の時に同市小戸小学校へ転校、以後宮崎西中学校、宮崎日向学院高校を経て神奈川県伊勢原市にある東海大学医学部へ入学しました。初めて親もとを離れ最初はいろいろ苦労もありました。時には自分を見失ない周囲に流されてしまい苦い経験も幾度となくくりかえしました。この“幾度となくくり返す”というのが私の弱いところでありまして先輩、友人の言葉を参考に自分なりに試考錯誤をくりかえし結果的には自分を見失なう事なく平成元年度国家試験をパスし社会人の仲間入りを果たす事が出来ました。

言い遅れましたが、私は昭和36年生まれの心身共に健康な男子です(？)

社会人としての出発地は神奈川県平塚市にある済生会平塚病院でした。社会人としての生活はすべてが新鮮で一日のほとんどを病院の医局ですごしました。この病院には東海大の他日本医科大学から、内科、外科の先生方がこられており私にとって良き先輩として接して下さいました。出身大学の違いの為、時にはけん制し合う事もありましたが、今あらためてふり返ると楽しい思い出でいっぱいでした。別れの時、かなりつらいものがあり、離れたくないという想いもありましたが、地元宮崎での再出発への期待を糧に10年間という長い期間をすごした地をあとにしました。

私が宮崎医科大学整形外科の医局にお世話になる様になり、早いものですでに６ヶ月が過ぎようとしています。後悔はありません。いつの日か、一人の整形外科医として胸をはってお世話になった方々に挨拶にいく事を夢見、決して名医になれずとも良医になれるよう頑張っていきたいと考えています。

氏　　名　大　田　博　人
生年月日　昭和40年９月15日生
出身高校　宮崎西高校
出身大学　宮崎医科大学　平成２年入局
血 液 型　Ｏ　型

私は、今年入局しました大田と申します。出身は宮崎県えびの市で、宮崎西高校を卒業し、宮医大から整形へ入れていただきました。

入局してから今日まで、整形外科医がどうあるのが最もよく、又自分はどういう医師を目指そうかと考えようと思っていました。しかし、人一倍学問の「映りの悪い」自分は、同じ事を何回も学ばねば頭に入らないため、それさえもままならなく過ごしてしまっている今日この頃であります。

今は、日々に追われてはいますが、毎日が新鮮で、とても学ぶことが多い生活を送っています。正直なところキツイ面もありますが、充実していると思います。自分が整形に決めた理由として、一つは日常に密着した疾患を扱うということと、患者さんに自分達が一生懸命やればそれに見合った結果を手に入れてあげられるからです。本当にそうなれるかどうか不安となることもありますが、自分なりにガンバってみたいと思っております。

色々と御迷惑をおかけするかもしれませんが、体当たりでやりますのでよろしくお願いします。

氏　　名　工　藤　勝　司
生年月日　昭和38年11月１日生
出身高校　福岡県立三池高校
出身大学　宮崎医科大学　平成２年入局
血 液 型　Ｂ　型

私は、福岡県大牟田市で生まれ育ち、昭和57年３月、福岡県立三池高等学校を卒業後、２年間の浪人生活を経て昭和59年４月、宮崎医科大学に入学後、無事６年間でなんとか卒業し予定通り整形外科に入局させて頂きました。実際に入局してみて、きびしいながらも和やかな雰囲気のうちの中でのびのびと仕事に打ち込めています。

今後の抱負としては、救急を含む外傷を中心にやらせてもらえたらと思っています。そもそも自分が医師を試ざしたのは、目の前で痛み苦しんでいる人の痛みを少しでも早く取り除いて楽にしてあげたいと思っていたからです。そのためには、全身をみれて、適切な処置を行ない、必要とあらばメスを握り手術をできる外科系の医師にと考えておりました。また、Ｑ．Ｏ．Ｌ．の向上と最も関係があると思われる、リハビリテーションにも精通した整形外科医を心指すようになりました。まだ入局したばかりで、点滴・包

交にさえ右往左往していますが、毎日何か一つでも整形外科的技術を身に付けようと努力しているつもりです。今後、一新された宮崎医科大学整形外科の一員としてはずかしくないような整形外科医になれる様、日々精進していきますので、宜しくお願い致します。

氏　　名　黒　木　浩　史
生年月日　昭和41年３月７日生
出身高校　宮崎大宮高校
出身大学　宮崎医科大学　平成２年入局
血 液 型　Ｂ　型

初めまして。本年６月に入局しました研修医１年目の黒木浩史と申します。出身は宮崎市で、宮崎大宮高校卒業後、第11期生として本大学に入学し、今年でめでたく卒業でき、整形外科に入局させて頂きました。

６月に入局後、早くも４ヵ月が過ぎ去りました。この間、ただ必死に、仕事をこなせるようにしよう、皆に迷惑をかけぬよう早く仕事を覚えようとがんばってきました。最近ようやく、いろはのいが少し分かり始めてきたところです。

入局前から整形外科という医局は大変明るくなじみ易いところだとお聞きしておりましたが、全くその通りで、田島先生をはじめ、一期上の先生方まで大変お話しし易く、無知な自分の面倒をとても親切にみて下さいます。今は、本当に整形外科に入局してよかったと痛感しているところです。

自分は、まだまだ何一つ一人ではできない未熟者ですが、一日も早く医局の戦力になれるよう努力していきたいと思っております。皆様にはいろいろと御迷惑をかけることとは存じますが、今後とも宜しく御指導をたまわりますようお願い申し上げます。

氏　　名　樋　口　潤　一
生年月日　昭和38年６月６日生
出身高校　日向学院高校
出身大学　久留米大学　平成２年入局
血 液 型　Ａ　型

本年６月に、整形外科に入局いたしました樋口潤一です。自己紹介のはじめに、簡単なプロフィールを紹介させていただきます。

生年月日：昭和38年６月６日
出 身 地：宮崎県延岡市
身　　長：183cm
体　　重：85kg
学　　歴：Ｓ51年３月　延岡市立延岡小学校卒業
　　Ｓ54年３月　私立日向学院中学校卒業
　　Ｓ54年４月　私立日向学院高等学校入学
　　Ｓ57年３月　　同上　　卒業
　　Ｓ58年４月　久留米大学医学部入学
　　Ｈ２年３月　　同上　　卒業

（途中、二度ほど寄り道をしていますが、少々の回り道は、人生には必要なものと考えております。）

延岡で生まれ、父の仕事の関係で長崎、諫早と移り、小学３年で延岡に帰ってきたと思いきや、中学高校の多感な時期を、親元を離れて宮崎で過ごし、また途中、熊本で寄り道をして久留米にたどりつき、７年間の学生生活を終え８年振りに宮崎に帰ってきました。

このような私が、整形外科医の道に進もうと思った理由の一つは、学生時代に、ある先生から言われた言葉が心に残っていたからです。それは、「病気を診るのではなく、病気になった人、即ち患者を診る医者になりなさい。」と言う言葉です。つまり、同じ疾患でも患者それぞれの社会的背景、家庭環境などが異なると、医師のアプローチの仕方も変わってくるはずだから、そう言う気持ちを持って、患者に接する事が大切だということです。そういった意味で、整形外科では治療や後療法が、退院後の活動の程度を考慮に入れて行われており、自分が目指す医療の姿に近いと考えました。

また、小さい頃から様々なスポーツと係わってき、高校生の頃からスポーツ医学に興味を持ち、大学に入ってからもクラブ活動の中で外傷と外傷後の競技復帰までのトレーニング（リハビリ）に、身近な問題として接しているうちに、将来スポーツ医学の道に進みたいと言う思いが強くなっていました。

実際に、整形外科医として数ヵ月が過ぎ、病棟での仕事の忙しさに追われ、何となく一日を過ごしてしまいがちになりつつありますが、初心を忘れることなく頑張っていきたいと思っておりますので、御指導、御鞭撻、宜しくお願い致します。

氏　　名　松　元　征　徳
生年月日　昭和40年４月16日生
出身高校　鹿児島県立鶴丸高校
出身大学　宮崎医科大学　平成２年入局
血 液 型　Ａ　型

私が医者になろうと考えはじめたのは中学生の頃だったように思います。当時、私はいつも母に苦労ばかりかけるような生活をしていました。父が単身赴任であったこともありますが、夜遊びはするし、喧嘩

はするし、よく教官室で担任から母の前で殴られたものでした。そんな時、母の職場（老人ホーム）の運動会の手伝いに行かされました。ホーム内の雰囲気、母の仕事、老人との会話、全てが驚きと感動でした。その日、一人車椅子に乗って喋ることが不自由な老人を暇潰しに散歩に連れて行ってやりました。何を話しても、どこに行っても老人はとても喜んでくれました。運動会の片付けが終わり、その老人に帰ることを伝えに行った時、老人が私の手をひっぱり目を潤ませ、口をもごもごさせ何かを言おうとしていました。その内容はわかりませんがその老人の寂しさが、しわくちゃの顔と力強く握っている手から感じられました。単なる一つの出来事にすぎませんが、その時の私、いや今の私にとっても、それは医療の原点になっているんです。

宮崎医科大学に入学し、よく遊びよく学び年を少しとると私なりに自分がわかってきました。私は頭脳的ではなく直感的労働型であること、診断より治療に向いていること、明るく意欲的な雰囲気の方が、自分を発揮できることなど。整形外科としての目的は患者をどれだけ確実に高いレベルで治し、社会に復帰させるかということだと私は考えます。ですから患者も医者も意欲的で明るくやり甲斐のあるものです。また、一般の整形・災害外科のみならず、スポーツ医学、リハビリテーション、高齢化社会に向け益々ニーズが高くなっていく科だと思います。救急からリハビリテーションまで幅広く要求され、私自身、多くの興味ある分野があります。私の性格と、このような理由で私は整形外科を希望しました。

整形外科医として仕事をはじめて半年近くたちますが、非常に良い医局に入局できたことを喜んでいます。教授は野球好きで負けず嫌いですし、助教授はユーモアで酒が強いですし、少人数で精力的に活動している雰囲気を医局内に強く感じます。今の日本の医療は白衣を着ている者がいばり、患られる者が卑屈になっている状態が多いと思いますが、私たちの病棟にはそんな様子がないのもうれしい事実だと思います。

今、私が考えるのは、そういう恵まれた環境に甘えることなく努力することだと思います。入局してすぐ病棟で若い患者がショック状態となり急死しました。私がその時できたことは、自分が医者でありながら、他の医者の応援を頼みに行くこと、心マッサージのための固い板を探すこと、そして祈ることでした。自分の無力さと、外科医として救急のＡＢＣもできず、初めて人間の死に直面したとは、はがゆさとあせりを痛裂に感じさせられました。勉強したいことがたくさんある、やらなければならないこともたくさんある。時間は限られている。こんな中、時に流されて今の自分を失なう時もあります。そんな時は私の医療の原点にもどります。患者との会話、身体的だけでなく精神的な手当て、そして患者と家族と一体となって意欲的に治療して行きたいと思うのです。私の目指す医師像はごく平凡でありますが人間的でありたいということです。

整形外科医としての今後の抱負ですが、今は漠然としてはっきりしていないのが実情です。ただ、独身で若いうちに救急の仕事をしたいこと。患者と、とことん付きあうためにもリハビリテーションを学びたいこと、自分の一生をかけて何か一つだけでも私の研究の結果を今後の医療の発展に残したいこと、スポーツ医学を学び母校の野球部を甲子園に出場させたいこと、そして来年辺りでも、田島教授率いる我が整形外科医局野球部を優勝させることです。何か話しにまとまりがなくなってきたようですが、一生懸命がんばりますのでよろしくお願いします。

新入医局員のプロフィールを自己紹介としてお願い致しましたが、学外で多忙な毎日を送る諸氏には原稿が間に合いませんでした。そこでこの諸兄のプロフィールは、医局内の噂話としての他人紹介と致します。

氏　　名　**柳　園　賜一郎**
生年月日　昭和38年９月６日生
出身高校　宮崎西高校
出身大学　宮崎医科大学

性格はオットリしており、とにかく気まじめで、人がいいとの事です。飲む事野球をする事大好き人間ですが、惜しまれるのは、ノミの心臓との事でした。

氏　　名　**浪　平　辰　州**
生年月日　昭和34年５月14日生
出身高校　熊本マリスト高校
出身大学　宮崎医科大学

独身。医局内での紹介は、これだけに止めたほうがいいというのが、この人の評。

氏　　名　**作　　良　彦**
生年月日　昭和35年２月20日生
出身高校　日向学院
出身大学　福岡大学

歌って、踊れて、しかも走れるというすばらしい整形外科医だそうです。

氏　　名　**黒　木　龍　二**
生年月日　昭和39年12月12日生
出身高校　宮崎西高校
出身大学　宮崎医科大学

仕事はまじめでしかも確実。欠点としては、尻に火がつかないと立ち上らないという事です。

氏　　名　**坂　本　康　典**
生年月日　昭和38年７月19日生
出身高校　宮崎南高校
出身大学　宮崎医科大学

スローテンポではありますが確実です。以前医局に在籍した誰かに似ているとの事ですが、毒舌はありません。ゴルファーの川岸良兼に似ていますが、スコアはまだです。頚損運びの名人との事でした。

氏　　名　**永　井　孝　文**
生年月日　昭和28年４月30日生
出身高校　都城泉ヶ丘高校
出身大学　熊本大学

性格もよく、まじめで几張面な人です。字もきれいだそうですが、医局評として、もう少し視野が広がると、もっと大物になるとの事でした。

以上６人の紹介は、医局員の独断と偏見でなされたものですが、自己紹介をされた方々と共に、大物になって下さい。期待してまっせ!!

教室同門の研究業績

◆原著発表

1　Radiological findings of the lumbar spine in rheumatoid arthritis

Shigeru Kuwahara　Naoya Tajima　Kuninori Aso
Takurou Sugano
Japanese Journal of Rheumatology　2（1）：p 15－26，1989

2　腰部椎間板ヘルニアに対する chymopapain 注入療法

田代　宏一　田島　直也　川野桂一郎　松本　宏一
久保紳一郎
整形外科と災害外科　37巻3号，p 1154－1159，1989

3　脊髄腫瘍における MRI の検討

松田　寿義　田島　直也　田代　宏一　川野桂一郎
松本　宏一
整形外科と災害外科　37巻4号，p 1560－1563，1989

4　Posterolateral Fusion of the Lumbar and Lumbosacral Spine－A Review of Long Term Results－

Naoya Tajima　Keiichiro Kawano　Keisuke Sera
Atsushi Taguchi
Japanese Journal of Orthopedics Association　63：p 262－268，1989

5　腰部手術後のスポーツ復帰に関して

押川紘一郎　田島　直也　川野桂一郎
九州スポーツ医科学会誌　1巻，p 69－71，1989

6　陸上長距離選手の運動生理学的研究

田島　直也　黒木　俊政　押川紘一郎　柴山秀太郎
九州スポーツ医科学会誌　1巻，p 116－118，1989

7　胸腰部脊髄損傷に対する Instrument－segmental square spinal（仮称3・S）instruments－ の試み

田島　直也　松本　宏一　田代　宏一　黒木　俊政
日本パラプレジア医学会雑誌　2巻1号，p 106－107，1989

8 ＲＡ脊椎手術例について—手術前後に問題のあった症例—

桑原　茂　木村　千俣　田島　直也　武内　晴明
税所幸一郎　脇山　尚登　麻生　邦典　金井　純次
九州リウマチ　８巻，ｐ13～17，1989

9 Experimental study of Reflectance Spectrophotometric Analysis of the Dog's Dural Sac－in the Open Decompressed State and after the Application of External Dural Pressure

Naoya Tajima　Keiichiro Kawano　Kouichi Matsumoto
Kouichi Tashiro　Kouichiro Saisho
Paraplegia　27，ｐ198－203，1989

10 腰部変性疾患等に対する Segmental Square Spinal（仮称３－Ｓ）Instrumentation

黒木　俊政　田島　直也　松本　宏一　田代　宏一
浪平　辰州
西日本脊椎研究会誌　15巻２号，ｐ312－316，1989

11 改良型 Segmental Square Spinal instruments（仮称３－Ｓ）について

田島　直也　松本　宏一　田代　宏一　黒木　俊政
黒木　隆男　川野桂一郎
西日本脊椎研究会誌　15巻２号，ｐ240－242，1989

12 脊椎手術後の腰痛・坐骨神経痛の病態と治療法

田島　直也
Monthly Book Orthopaedics 15kann7gatugou，ｐ67－74，1989

13 慢性リウマチ—最近の話題

木村　千俣　田島　直也
最新医学　44巻９号，ｐ1847－1851，1989

14 脊椎疾患における MRI の検討—特に椎体病変を主として—

田代　宏一　田島　直也　松本　宏一　黒木　俊政
黒木　隆男　川野桂一郎
整形外科と災害外科　38巻１号，ｐ89－93，1989

15　不安定腰椎—特に Rotational Instability について(第2報)—

松本　宏一　　田島　直也　　田代　宏一　　黒木　俊政

浪平　辰州　　川野桂一郎

整形外科と災害外科　38巻1号，p 152－156，1989

16　RA脊椎の病理

桑原　　茂　　田島　直也　　菅野　卓郎

脊椎・脊髄ジャーナル2巻10号，p 707－714，1989

17　Spinal Instrument for the Lumbar spine in Rheumatoid Arthritis

Naoya Tajima　　Kouichi Matsumoto　　Shigeru Kuwahara

Chihiro Kimura　　Tohyo Maehara

Jpn. J. Rheum. Joint Surg. 8, p 205－212, 1989

18　腰背筋腱症（筋・筋膜性腰痛）—スポーツ医学での初期治療—

田島　直也

臨床スポーツ医学　6巻，p 253－256（臨時増刊），1989

19　脊髄および椎間板造影

田島　直也

リウマチ科　2，p 683－700，1989

20　寛骨臼球状骨切り術

長鶴　義隆

臨床整形外科　24，p 77－83，1989

21　骨盤骨切り術のX線学的検討

長鶴　義隆

整形・災害外科　32，p 325－329，1989

22　寛骨臼球状骨切り術(SAO)における低血圧麻酔と自己血輸血法

長鶴　義隆　　平川　俊一　　森田　信二　　柏木　輝行

日本整形外科学会雑誌　63，p 391，1989

23　股関節症に対する大腿骨骨切り術の短期成績

平川　俊一　　長鶴　義隆　　三股　恒夫　　森田　信二
柏木　輝行
中部日本整形外科災害外科学会雑誌　32，1496－1497，1989

24　大腿骨頭辷り症の治療経験

三股　恒夫　　長鶴　義隆　　平川　俊一　　帖佐　悦男
整形外科と災害外科　38，p 515－519，1989

25　Perthes 病に対する大腿骨骨切り術と Salter 骨盤骨切り術併用の検討

森田　信二　　長鶴　義隆　　平川　俊一　　麻生　邦典
西日本小児整形外科　1，p 62－64，1989

26　進行期両側性股関節症に対する寛骨臼球状骨切り術の検討

長鶴　義隆　　平川　俊一　　森田　信二　　三股　恒夫
帖佐　悦男　　柏木　輝行
HIP Joint　15，p 125－128，1989

27　エンダー髄内釘埋没法の試み

大江　幸政　　大江　幸夫　　木村　千例　　桑原　　茂
麻生　邦典
整形外科と災害外科　37巻 3 号，p 1068－1072，1989

28　TKR 術後に感染を来した RA 症例に対する持続灌流法の試み

麻生　邦典　　木村　千例　　桑原　　茂　　税所幸一郎
金井　純次
別冊整形外科　15，p 193－195，1989

29　RA 下位頚椎病変の X 線学的検討

金井　純次　　木村　千例　　田島　直也　　桑原　　茂
税所幸一郎　　麻生　邦典　　作　　良彦
整形外科と災害外科　38巻 2 号，p 439－442，1989

30　Dynamic Analysis of High Order Activities of Normal Human Postural Sways

Ichiro Yamaguchi
The Journal of the Japanese Orthopaedic Association Vo163 No8,
p 44－53，1989

◆症例報告

1　骨粗鬆症に伴う腰椎圧迫骨折による下肢不全麻痺の3例

前原　東洋　　吉永　一春　　福田　稔朗　　前原　東作
田島　直也　　川野桂一郎　　税所幸一郎　　木村　千仭
森園　良幸　　松元　光生
整形外科　40巻2号，p177－184，1989

2　RAに伴う腰椎椎体Collapseに起因する下肢不全麻痺の2例

前原　東洋　　福田　稔朗　　吉永　一春　　田島　直也
川野桂一郎　　森園　良幸　　松元　光生
九州リウマチ　8巻，p18－22，1989

3　Spina bifidaの4症例

松本　宏一　　田島　直也　　川野桂一郎　　田代　宏一
久保紳一郎
西日本脊椎研究会誌　15巻1号，p48－52，1989

4　下肢麻痺症状を呈し前方後方腰椎固定を行なったRA患者の1例

川野桂一郎　　田島　直也　　松本　宏一　　田代　宏一
久保紳一郎　　木村　千仭
九州リウマチ　8巻，p23－26，1989

5　神経の捻れを呈した橈骨神経深枝麻痺の1例

戸田　　勝　　中村　誠司　　柳園賜一郎　　木村　千仭
整形外科と災害外科　38巻1号，p319－321，1989

◆学会報告

1　MRSAによる小児大腿骨頚部骨髄炎の治療経験

柏木　輝行　　長鶴　義隆　　平川　純一　　三股　恒夫
森田　信二　　田辺　龍樹　　鈴宮　寛子
第5回九州小児整形外科懇話会，1989，1，福岡

2　RA 股に対する Precision Hip System の小経験

税所幸一郎　木村　千仞　桑原　茂　麻生　邦典
金井　純次　作　良彦
第19回人工関節研究会，1989，1，東京

3　RA 肘関節強直例に対する関節形成術

桑原　茂　木村　千仞　武内　晴明　税所幸一郎
脇山　尚登
第1回日本肘関節研究会，1989，2，東京

4　外側滑膜ヒダ障害による肘関節 Locking を来した1症例

中村　誠司　戸田　勝　山口　一郎　柳園賜一郎
黒木　隆男　木村　千仞
第10回九州手の外科研究会，1989，2，沖縄

5　長距離運動選手の体力、運動生理学的検討

黒木　俊政　田島　直也
第3回宮崎スポーツ医学研究会，1989，2，宮崎

6　当教室における膝のスポーツ障害

立山　洋司　桑原　茂　税所幸一郎　津曲　孝康
浪平　辰州　木村　千仞
第3回宮崎スポーツ医学研究会，1989，2，宮崎

7　水泳・飛び込みによる頚椎脱臼骨折の1例

柏木　輝行　田島　直也　松本　宏一　金井　純次
第3回宮崎スポーツ医学研究会，1989，2，宮崎

8　ペルテス病に対する大腿骨骨切り術と Salter 骨盤骨切り術併用の検討

森田　信二　長鶴　義隆　平川　俊一　麻生　邦典
柏木　輝行
第1回西日本小児整形外科学会，1989，2，大阪

9　慢性関節リウマチに角層下膿疱症を合併した1例

浪平　辰州　木村　千仞　桑原　茂　税所幸一郎
立山　洋司　津曲　孝康　井上　勝平　黒川　基樹
第34回九州リウマチ研究会，1989，3，沖縄

10　RA 上位頚椎亜脱臼に対するローゼントラウシェルコンプレッションクランプの使用経験

津曲　孝康　　木村　千仞　　田島　直也　　桑原　　茂

税所幸一郎　　立山　洋司　　浪平　辰州

第34回九州リウマチ研究会，1989，3，沖縄

11　高齢者の運動器疾患―特に脊椎疾患の治療について

田島　直也

宮崎県児湯医師会講演会，1989，3，宮崎

12　RA 肘関節の造影時におけるリンパ管描出について

立山　洋司　　木村　千仞　　田島　直也　　桑原　　茂

税所幸一郎　　津曲　孝康　　浪平　辰州

第34回九州リウマチ研究会，1989，3，沖縄

13　寛骨臼球状骨切り術 (SAO) における低血圧麻酔と自己血輸血法

長鶴　義隆　　平川　俊一　　森田　信二　　柏木　輝行

第62回日本整形外科学会，1989，4，千葉

14　RA の肘関節造影像から見た肘関節手術の適応の検討

税所幸一郎　　木村　千仞　　田島　直也　　桑原　　茂

麻生　邦典　　金井　純次　　作　　良彦

第34回日本整形外科学会，1989，4，千葉

15　中高年のランニングによるスポーツ障害について

田島　直也

延岡スポーツ医学研究会，1989，4，宮崎

16　New Spinal Instrumentation for Unstable Thoracic and Lumbar Spine

Naoya Tajima　　Kouichi Matsumoto　　Kouichi Tashiro

Toshimasa Kuroki

Tte International Society for the Study of the Lumbar Spine,

1989，　5，　Kyouto

17　RA 頚椎の病理所見

桑原　　茂　　田島　直也　　木村　千仞　　菅野　卓郎

第33回日本リウマチ学会，1989，5，東京

18　関節内注入療法の関節軟骨に及ぼす影響について—第２法—

脇山　尚登　　桑原　　茂　　木村　千仞　　武内　晴明
税所幸一郎
第33回日本リウマチ学会，1989，５，東京

19　内反股に対する骨形成的大腿骨外反骨切り術

長鶴　義隆　　平川　俊一　　森田　信二　　麻生　邦典
柏木　輝行
第72回中部日本整形災害外科学会，1989，５，

20　橈骨遠位端骨折変形治癒に対する矯正骨切り術の経験

黒木　隆男　　中村　誠司　　戸田　　勝　　山口　一郎
田島　直也　　木村　千仞
第18回宮崎整形外科懇話会，1989，６，宮崎

21　Double crush syndrome を呈した胸郭出口症候群について

中村　誠司　　黒木　隆男　　戸田　　勝　　山口　一郎
田島　直也　　木村　千仞
第18回宮崎整形外科懇話会，1989，６，宮崎

22　RA 膝屈曲障害に対する矯正法の一工夫

桑原　　茂
第18回宮崎整形外科懇話会，1989，６，宮崎

23　膝離断性骨軟骨炎に対するフィブリン糊を使用した固定の経験

浪平　辰州　　税所幸一郎　　立山　洋司　　津曲　孝康
木村　千仞　　桑原　　茂
第18回宮崎整形外科懇話会，1989，６，宮崎

24　大腿骨頚部疲労骨折の１例

森田　信二　　長鶴　義隆　　平川　俊一　　麻生　邦典
第18回宮崎整形外科懇話会，1989，６，宮崎

25　広範脊椎管狭窄症の１例

作　　良彦　　上塚　　満　　帖佐　悦男　　田島　直也
田代　宏一
第18回宮崎整形外科懇話会，1989，６，宮崎

26　大量の排膿を伴った脊椎カリエスの１例

柏木　輝行　　田島　直也　　松本　宏一　　田代　宏一
黒木　俊政　　金井　純次　　倉内　省三
第18回宮崎整形外科懇話会，1989，６，宮崎

27　宮崎市郡医師会病院における最近１年間の手術症例の検討

武内　晴明　　植村　貞仁　　鳥取部光司　　桑原　　茂
麻生　邦典
第18回宮崎整形外科懇話会，1989，６，宮崎

28　宮崎市郡医師会病院における高齢者骨折の治療経験

植村　貞仁　　武内　晴明　　鳥取部光司　　桑原　　茂
麻生　邦典
第18回宮崎整形外科懇話会，1989，６，宮崎

29　CP の股関節障害に対する治療経験

森田　信二　　長鶴　義隆　　平川　俊一　　三股　恒夫
麻生　邦典
第77回西日本整形災害外科学会，1989，６，久留米

30　足関節外側側副靭帯損傷の治療経験

麻生　邦典　　長鶴　義隆　　三浦　広典　　河野　雅行
第77回西日本整形災害外科学会，1989，６，久留米

31　腰椎疾患手術後の腰痛・坐骨神経痛について

田代　宏一　　田島　直也　　松本　宏一　　黒木　俊政
金井　純次　　柏木　輝行
第77回西日本整形災害外科学会，1989，６，久留米

32　重度 RA 足関節病変に対する外科的治療について

津曲　孝康　　木村　千仞　　桑原　　茂　　税所幸一郎
立山　洋司　　浪平　辰州
第77回西日本整形災害外科学会，1989，６，久留米

33　Protorsio Acetabli を呈した RA 股に対するフィブリン糊を使用した骨移植併用人工股関節全置換術

立山　洋司　　木村　千仞　　桑原　　茂　　税所幸一郎

津曲　孝康　　浪平　辰州

第77回西日本整形災害外科学会，1989，6，久留米

34　モアレ法による学童側彎症検診の再検討

黒木　俊政　　田島　直也　　松本　宏一　　田代　宏一

金井　純次　　柏木　輝行

第77回西日本整形災害外科学会，1989，6，久留米

35　長距離陸上競技者における腰痛

黒木　俊政　　田島　直也　　松本　宏一　　田代　宏一

金井　純次　　柏木　輝行　　押川紘一郎

第31回西日本脊椎研究会，1989，6，宮崎

36　慢性関節リウマチ後足部変形と足部関節変化について

税所幸一郎　　木村　千仞　　桑原　　茂　　立山　洋司

津曲　孝康　　浪平　辰州

第14回日本の足の外科研究会，1989，7，東京

37　小児骨折の疫学的研究

田島　直也　　武内　晴明　　久保紳一郎　　木村　千仞

浜田　　稔

第15回日本整形外科スポーツ医学会，1989，7，北海道

38　高齢者の腰輩痛について—特に骨粗鬆症を中心にして—

田島　直也

宮崎県日向市・東臼杵郡医師会内科医会，1989，7，宮崎

39　骨代謝における mast cell の関与—第２報・骨折治癒における組織学的研究—

谷口　博信　　木村　千仞　　桑原　　茂　　名和　行文

第４回日本骨代謝学会，1989，7，東京

40　人工関節置換術後に強直を来した症例

桑原　　茂　　木村　千仞　　田島　直也　　武内　晴明

税所幸一郎　　金井　純次　　作　　良彦

第18回東日本リウマチの外科研究会，1989，8，秋田

41　健康とスポーツ医学

田島　直也

宮崎県医師会夏期医学会，1989，9，宮崎

42　手術により野球復帰できた腰椎分離症の1例

柳園賜一郎　田島　直也　松本　宏一　黒木　俊政

田中　史郎

第4回宮崎県スポーツ医学研究会，1989，9，宮崎

43　柔道選手の腰部障害

黒木　俊政　田島　直也　松本　宏一　押川紘一郎

広田　影

第4回宮崎県スポーツ医学研究会，1989，9，宮崎

44　柔道選手における maisonneuve 骨折の1例

柏木　輝行　*田島　直也　黒木　俊政　武内　晴明

広田　影　押川紘一郎

第4回宮崎県スポーツ医学研究会，1989，9，宮崎

45　スポーツによる前腸骨棘剝離骨折の治療経験

浪平　辰州　長鶴　義隆　平川　俊一　森田　信二

永井　孝文　押川紘一郎　河野　雅行　三股　恒夫

田辺　龍樹

第4回スポーツ医学研究会，1989，9，宮崎

46　女子長距離陸上競技選手の最大酸素摂取量

黒木　俊政　田島　直也　広田　影

第4回宮崎県スポーツ医学研究会，1989，9，宮崎

47　The Physical Fitness of Rheumatoid Patients

Chihiro Kimura　Haruaki Takeuchi　Naoya Tajima

Shigeru Kuwahara

XVII ILAR Congress of Rheumatology, 1989, Brazil

48　CPMによるTKR術後リハビリテーションの経験

桑原　茂　木村　千佴　田島　直也　武内　晴明
税所幸一郎　金井　純次　作　良彦
第35回九州リウマチ研究会，1989，9，大分

49　Tiopronin が著効であった悪性関節リウマチの1例

税所幸一郎　松田　寿義　木村　千佴　田島　直也
桑原　茂　麻生　邦典　金井　純次　後藤　一成
第35回九州リウマチ研究会，1989，9，大分

50　大転子移行術の検討

長鶴　義隆　平川　俊一　森田　信二　麻生　邦典
第73回中部日本整形災害外科学会，1989，10，香川

51　RA上位頚椎の手術症例の検討

田島　直也　松本　宏一　田代　宏一　木村　千佴
桑原　茂
第17回日本リウマチ関節外科学会，1989，11，大阪

52　RAのlate stage肘に対する滑膜切除術について—関節形成術との比較—

税所幸一郎　木村　千佴　桑原　茂　麻生　邦典
松田　寿義
第17回日本リウマチ関節外科学会，1989，11，大阪

53　RA頚椎のMRI所見

桑原　茂　木村　千佴　田島　直也　麻生　邦典
金井　純次
第17回日本リウマチ関節外科学会，1989，11，大阪

54　腰椎椎間板ヘルニアに対するLove法の手術成績

黒木　俊政　田島　直也　松本　宏一　柳園賜一郎
田中　史郎　永井　孝文　黒木　龍二　押川紘一郎
第78回西日本整形災害外科学会，1989，11，鹿児島

55　頚椎後縦靭帯骨化症手術症例の検討

田代　宏一　　田島　直也　　松本　宏一　　黒木　諸政
柳園賜一郎　　田中　史郎
第78回西日本整形災害外科学会，1989，11，鹿児島

56　RA 膝に対するオスミウム酸関節内注入法の検討

金井　純次　　桑原　　茂　　木村　千仞　　田島　直也
税所幸一郎　　麻生　邦典　　松田　寿義　　立山　洋司
柏木　輝行
第78回西日本整形災害外科学会，1989，11，鹿児島

57　大腿骨骨幹部疲労骨折の１例

松田　寿義　　税所幸一郎　　木村　千仞　　田島　直也
武内　晴明　　桑原　　茂　　金井　純次　　麻生　邦典
津曲　孝康
第78回西日本整形災害外科学会，1989，11，鹿児島

58　股関節に対する臼蓋形成術の検討

平川　俊一　　長鶴　義隆　　森田　信二　　浪平　辰州
永井　孝文
第78回西日本整形災害外科学会，1989，11，鹿児島

※今回の研究業績については、1989年までのものにとどめ、また、原著論文と症例報告、学会発表のみ収載しました。第３号に1990年の分を掲載致したいと思います。

編　集　後　記

宮崎医大同門会誌第二号がやっと出来上った。S 63年 1 月に第 1 号が刊行され、 2 年が経過しようとしている。この間、教室に於いては木村教授より田島教授への交代をはじめとして陣容の変化も目をみはるような出来事の連続であった。平成 2 年11月には、田島教授指揮下における第80回西日本整形災害外科学会が滞りなく開催された事は記憶に新しい。同門、教室が一体となって、目標を達成出来た事は、今後の対応に有益な経験として、残る事を期待する。第 2 号としての刊行は、当初11月中に発行の予定であったものの学会準備あるいは後仕末の為、編集にとりかかった時期が11月下旬となってしまい、編集者の怠慢をこの後記にてお詫びする次第である。

また、誌中、新入会員の紹介については文中に述べた如く、他人紹介の部分が掲載してあるが、これはあくまでも独断と偏見に基づいたものである事をここにもお詫びしておく。

業績については平成 1 年 9 月に開講15周年記念誌が出版された為、本年度の原著及び発表に止めてある。

最後に御多忙中にも拘らず御寄稿頂いた玉井前学長、木村前教授はじめ各先生方へ厚く感謝の意を表します。

次の第 3 号がもっと充実したものになるように念じて編集後記と致します。

〈伊勢記〉

H 2.12. 1

宮崎医大整形外科学教室

同　門　会　誌

発行日　平成２年１２月１０日
発行者　宮崎医科大学整形外科学教室同門会
編集責任者　伊　勢　紘　平
印刷者　㈾愛　文　社　印　刷　所